

錦絵「大日本物産圖會陸中國牧牛之圖」

牛の博物館開館20周年記念企画展

# 南部牛の姿をもとめて

柳之御所遺跡出土  
牛骨 脛骨



岩手県教育委員会 所蔵

第1回国内動物学博覧会  
出品動物写真生図  
葛巻牛



東京国立博物館 所蔵  
TNI Image Archives 画像提供

荷物運搬の牛の  
装備



小田やすらぎの家族伝資料館 所蔵

日本短角種

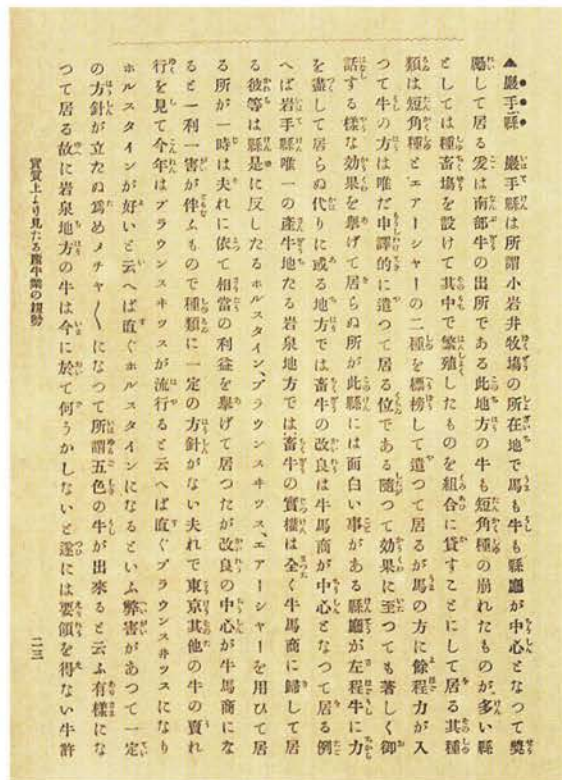


## 目次

ごあいさつ	2
日本の牛	3
南部牛の来歴	5
南部牛の姿	7
牛方の営み	9
日本短角種の誕生	13
展示資料一覧	15



牛の博物館



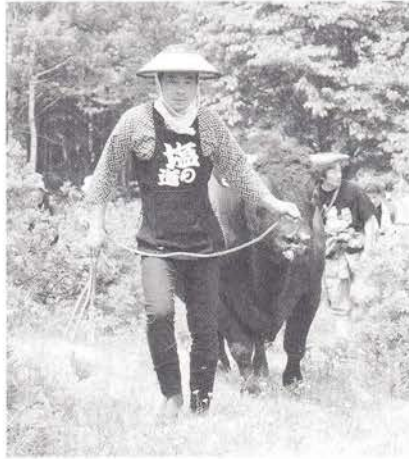
## 日本之産牛

望月瀧三 著

明治44年(1911)発行

奥州市牛の博物館 所蔵

国内の産牛の趨勢<sup>すうせい</sup>や外国品種の特性、飼養管理方法などを解説した本です。岩手県について「南部牛の出所」と紹介していますが、「短角種の崩れたものが多い」と厳しい評価をしています。明治の末には、日本在来牛と外国品種の雑種化が進んでおり、本書の内容にも安易な外国品種との交配を反省し、改良への関心が高まっていることが感じられます。



### 牛方道中の再現

岩手県久慈市山形町  
平庭高原つつじまつりにて  
久慈市 写真提供

## ごあいさつ

岩手県は、全国有数の畜牛飼養地域です。平成 26 年の統計では、肉用牛は全国 5 位の 9 万 7,100 頭が、乳用牛は全国 3 位の 4 万 5,500 頭が飼育されています。

現在の畜産振興をつくった要因のひとつとして、かつて南部藩領で飼育されていた「南部牛」の存在が挙げられます。岩手県北部では古くから牛を飼う習慣や技術があったため、明治以降のホルスタイン種の導入を抵抗なく受け入れ、葛巻・岩泉地方を中心とした北上山地北部が酪農地帯となってきました。そして、岩手県を中心に、南部牛の血をひく日本短角種が気候風土の特徴を活かした夏山冬里方式で飼育されています。日本短角種は近年の赤身肉嗜好や熟成肉人気の追い風を受け、地域ブランドとしてますます注目を集めています。

南部牛は沿岸地方と内陸地方の間で、鉄や塩などの物資の運搬を担っていました。本企画展では南部牛を、南部藩領、すなわち青森県の東半、三戸、八戸、上北、下北と岩手県北部および秋田県鹿角地方において飼育され、外国品種との交配の影響を受けていない純粋な日本の牛としています。残された資料をもとに南部牛の姿を追い、牛と共に厳しい自然を生き抜いてきた人々の生活を紹介します。産牛が成立し、発達してきた歴史的過程を振り返ることで、牛を育んできた風土の特徴を見直し、これからの畜産発展に寄与できれば幸いです。

最後に、本企画展の開催にあたりご協力を賜りました皆様に、心より感謝申し上げます。

平成 27 年 7 月

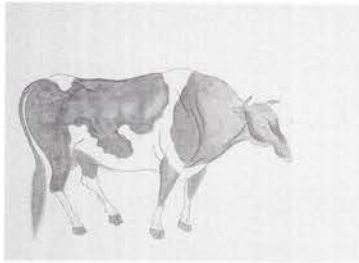
奥州市牛の博物館  
館長 内田 宏

# 日本の牛

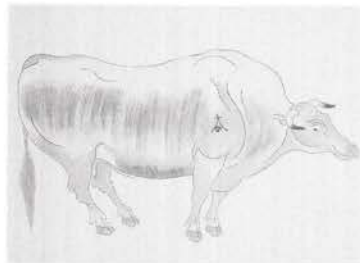
## ■記録に残る牛

3世紀末に中国で書かれた歴史書『三国志』のうちの『魏書』東夷伝倭人条（通称『魏志倭人伝』）には、弥生時代の日本には「牛・馬・虎・豹・羊・鶻なし」とあり、大陸では主要な家畜であった牛や馬がまだ日本に普及していなかったようです。古墳時代になると、牛をかたどった埴輪が発見されることから、この頃までには大陸から牛がもたらされていたことが分かります。

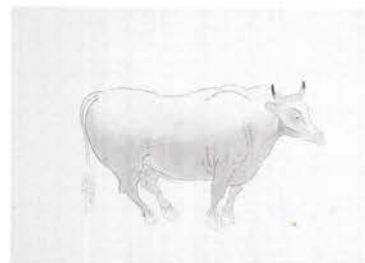
鎌倉時代の各地の牛の特徴を描いた「<sup>こくぎゅうじゅうず</sup>国牛十図」に、日本各地の牛の特徴を見ることができます。当時の日本の牛は体格や毛色が多岐にわたり、小柄ながらも首から肩まわりにかけての筋肉が発達していました。農耕や運搬など働き手としての役割が主であった牛は、こういった場面に適した特徴を備えていたことが分かります。



つくし  
筑紫牛



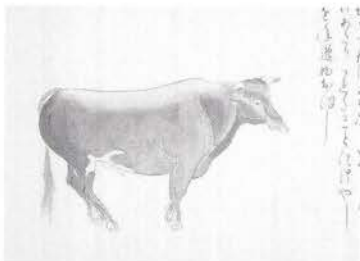
みくりや  
御厨牛



あわじ  
淡路牛



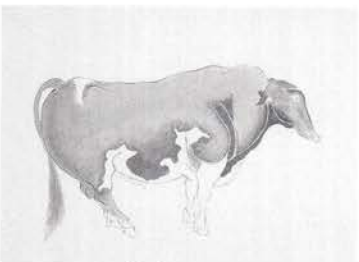
たじま  
但馬牛



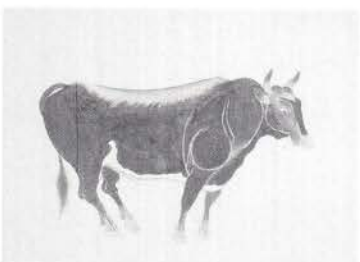
たんば  
丹波牛



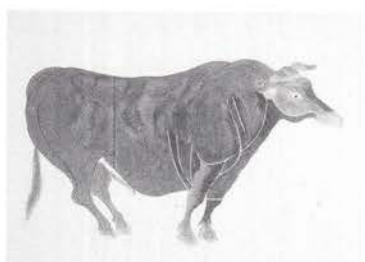
やまと  
大和牛



かわち  
河内牛



とようみ  
遠江牛



えちぜん  
越前牛

### こくぎゅうじゅうず 国牛十図

河東牧童寧直磨 画

鎌倉時代後期

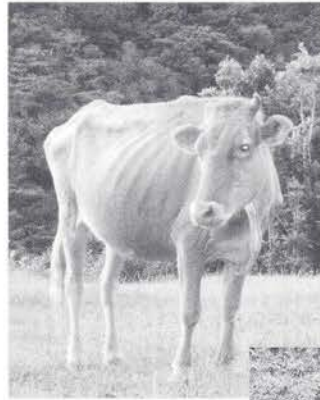
東京大学農学生命科学図書館 所蔵

各地で生産される牛の特徴を、図入りで説明しています。毛色や柄、体型が多岐にわたる牛が各地で生産されました。「馬は関東、牛は西国」と記述されているように、西日本の牛が中心で、東北地方の牛についての記述はありません。十番目の越後牛は図が失われています。

## ■日本固有の牛

黒毛和種、褐毛和種の遺伝子の多様性を調べた研究によると、日本の牛は大陸の牛に比べて、ミトコンドリア DNA の変異が小さく、小さな集団に由来することが分かっています。このことから、日本の牛は、大陸からやって来た少数の牛達を祖先とし、日本各地へ広がって大きな集団になっていったと推定されています。

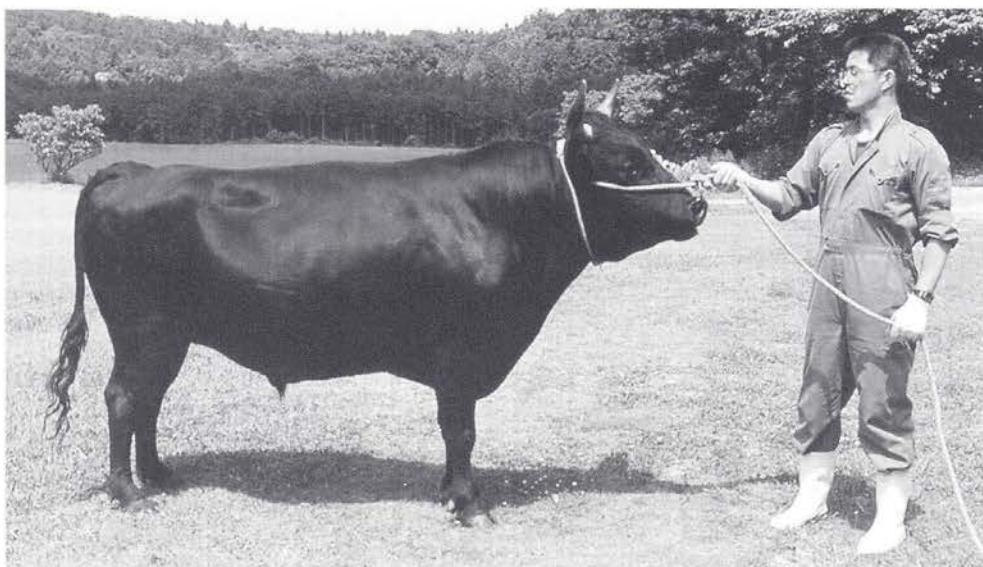
現在、純粋な日本の牛が国内2ヶ所に保存されています。山口県の見島に残る見島牛、鹿児島県の口之島に残る口之島牛です。どちらも外国品種と交配することなく維持されてきたと考えられています。これらの在来牛は体格が小柄で、前半身の肉付きがよい一方、後半身が貧弱で、近世以前の牛の特徴を残していると考えられています。口之島牛の毛色に黒毛以外の褐毛、<sup>十文字</sup> 縞模様や白斑が見られる点は、絵巻物に描かれた牛と共通しています。



### 口之島牛

鹿児島県鹿児島郡十島村口之島  
黒澤弥悦氏 写真撮影

大正時代に島外から導入された個体が再野生化したもので、小型で毛色が多岐にわたります。  
オス体高 122 cm メス体高 110 cm



### 見島牛

山口県萩市見島

外国品種との交配をせずに保存されてきた小型の在来牛です。  
脂肪交雑（サシ）に富む肉質は黒毛和種と共通する特徴です。  
オス体高 122 cm メス体高 115 cm

# 南部牛の来歴

## ■岩手に残る牛の痕跡

岩手県内の遺跡で発掘された牛の事例から、東北地方の牛の痕跡をたどってみましょう。

年代が確実なものでは、奈良時代の駒焼場遺跡（二戸市）の遺構で見つかった牛の白歯が最古の例です。平安時代になると、岩手県南地方でも牛の骨や水田に残された足跡が見つかり、広く牛が飼育されていたことが分かってきました。県南地域では、沢田遺跡（奥州市）や宮地遺跡（奥州市）でも牛骨や牛歯が出土しています。奥州藤原氏の政庁跡とされる柳之御所遺跡（平泉町）からはノコギリで切断された痕がある牛の脛骨<sup>けいこつ</sup>が発見されており、牛の骨が細工物に利用されていた可能性が指摘されています。また、同じく平泉の寺院跡である観自在王院跡からは、牛車の駐車場ともいえる車宿跡<sup>くるまやどり</sup>と考えられる遺構が見つかっています。奥州藤原氏も都の貴族と同じように、牛を飼い、牛車をひかせていたのでしょう。

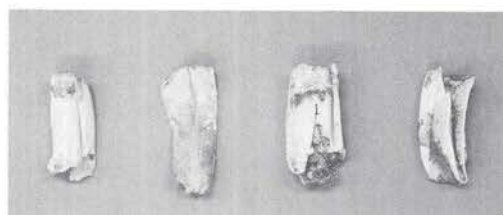


### 牛車の車宿跡<sup>くるまやどり</sup>

観自在王院跡（岩手県平泉町）  
平安時代

平泉町教育委員会 写真提供

鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡』に登場する、牛車の車宿跡であると考えられています。

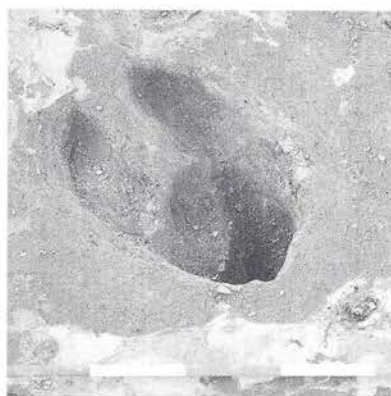


### 牛の歯（白歯片）

駒焼場遺跡（岩手県二戸市）出土  
奈良時代

二戸市埋蔵文化財センター 所蔵

小さな歯片ですが偶蹄類のものとされています。時代が確定しているものでは、岩手県内で最も古い牛の資料です。



### 水田跡にのこる牛の足跡

中村城跡（岩手県一関市）

平安時代

（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
写真提供

水田跡で人の足跡と一緒に発見されました。



### 牛の骨（脛骨）<sup>けいこつ</sup>

柳之御所遺跡（岩手県平泉町）出土  
平安時代

岩手県教育委員会 所蔵

大きなウシの脛骨には、ノコギリによる切断痕があり、骨を細工したと推定されます。



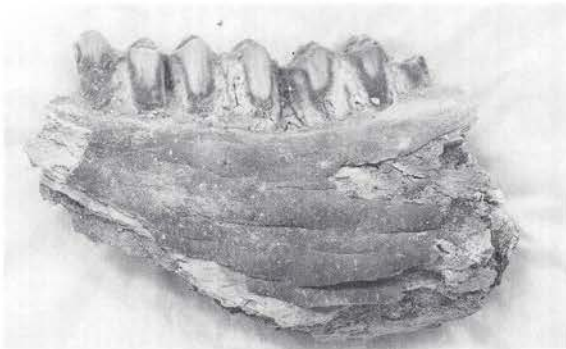
### 水田跡にのこる牛の足跡

竜ヶ坂遺跡（岩手県平泉町）

平安時代

平泉町教育委員会 写真提供

1頭の牛が水田の上を直線的に歩いた足跡が検出されました。農耕をしていたのではなく、偶然水田に入り込んだと考えられます。



### 牛の骨（左下顎骨および臼歯）

一戸城跡（岩手県一戸町）出土

古代～中世

一戸町教育委員会 所蔵

少なくとも3個体分の骨、歯が出土しています。歯の大きさから推定された体の大きさは、体高が100～115 cmと、見島牛のメス程度だったと推定されています。

## ■中世の牛の利用

平安時代の牛の出土例は岩手県南地方に多く見られましたが、中世以降は県北からの出土が中心となっていきます。千徳城遺跡群（宮古市）、一戸城跡（一戸町）、柳田館遺跡（紫波町）など、城跡や屋敷跡での牛骨の出土例は、武家の生活において、馬とともに牛が家畜として重要な地位を占めていたことを示しています。



### 牛の歯（上顎臼歯）

柳田館遺跡（岩手県紫波町）出土

16世紀末～17世紀初頭

岩手県教育委員会 所蔵

少なくとも2個体分の牛の歯が発見されました。現代の牛よりやや大きめの体格であったとされています。

## ■南部牛のルーツ

岩手県に暮らしていたこれらの牛は、西日本の牛とは遺伝的に異なる東北地方独自の牛だったのでしょ

うか？  
山田喜平(1922)によれば、『南部氏旧記』には、享徳3年(1454)、田名部（現在の青森県むつ市）領主蛸崎藏人が、南部氏への謀反のために韃靼<sup>だたん</sup>、露西亞<sup>ろしあ</sup>から軍馬とともに牛数百頭を輸入したとあります。また、『東北太平記（南部氏蔵書）』には、康正年間(1455～57)に南部氏が露国から牛千頭あまりを輸入したとの記録があるとされています。これらの記録が史実に基づくものであるのか意見が分かれています、当時の船で多数の牛馬の輸送が可能であったかどうかなど慎重な検討が待たれます。

また、将来、各地で発見された出土牛骨のDNA配列を調べることで、北方系の牛が南部牛の形成に関わっていたのか科学的に検討することが可能です。

# 南部牛の姿

## ■東北の生活を支えた牛

南部藩では牛馬の生産が盛んでした。この地域の牛は寒暑粗食に耐え、脚が丈夫で性質もおとなしく、荷駄用に適した特徴を持っていました。

江戸時代から明治初期にかけて、南部藩沿岸部での海産業や鉱工業の発達に伴い、牛を使って塩や炭、鉄を沿岸から内陸や藩外へ運搬する牛方が盛んになります。役牛として活躍した南部藩領の牛、すなわち青森県の東半、三戸、八戸、上北、下北と岩手県北部および秋田県鹿角地方において飼育されていた在来牛をのちに「南部牛」と呼ぶようになりました。

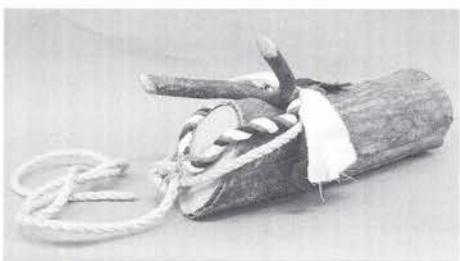
明治時代以降の外国品種との交配により、純粋な南部牛の姿を現在見ることはできず、一部の文献に記録が残るのみとなっています。



### 郷土玩具「ベゴ」

岩手県葛巻町 奥州市牛の博物館 所蔵

ベゴは方言で牛のことで、葛巻・岩泉地方で作られていた手作りの玩具です。アカマツの木を切り取り、枝を牛の角に見立てています。この地方にいた南部牛がこの玩具のモデルだったと考えられます。



### 郷土玩具「杵牛」

新潟県小千谷市 奥州市牛の博物館 所蔵

越後闘牛が伝わる新潟県小千谷の牛の玩具です。岩手県の「ベゴ」と共通した形状は、この地方にもたらされた南部牛の影響を想像させます。

### 越後古志郡二十村闘牛之圖 (部分)

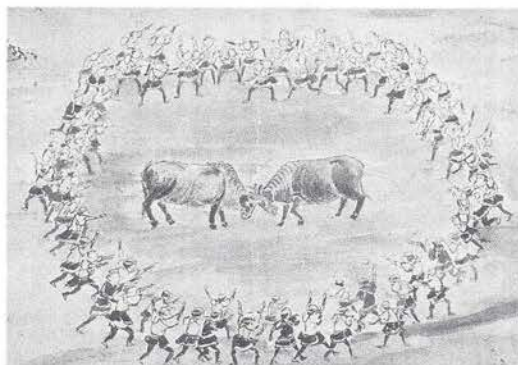
文政3年(1820) 長岡市立中央図書館 所蔵

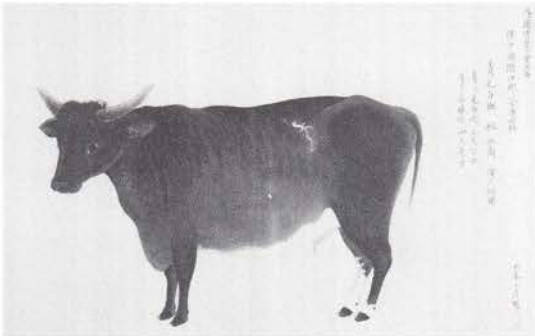
## ■描かれた南部牛

純粋な南部牛を写した写真はこれまで発見されていません。しかし、残された絵図から、南部牛の特徴を読み取ることができます。純粋な南部牛であることが確認された唯一の図版が、「第1回内国勸業<sup>ないこくかんぎょう</sup>博覧会出品動物類写生図」です。明治10年(1877)に東京で開催された内国勸業博覧会に、岩手県の釜津田村(現岩泉町)、葛巻村(現葛巻町)から出品された純粋和種が描かれており、1頭は黒毛、もう1頭は黒毛に白斑の牛です。同じく明治10年の錦絵「大日本物産圖會陸中國牧牛之圖」には、南部牛、もしくは南部牛と外国品種の雑種と思われる牛が放牧される様子が描かれ、黒毛、褐毛、それらの斑模様<sup>ふつさんす えりくちゅうこくぼくぎゅうのず</sup>の牛の姿が見えます。『岩泉中村文書 嘉永4年牛馬帳』にも「黒、黒絞、黒小絞、黒芦、黒簾、黒あし、赤絞、柄、柄あし、袴、鼻白、小絞、黒なし、柄絞、上白、とふち」と当地方の牛に多様な毛色があることが記されています。

南部藩以外の絵図にも、移出された南部牛とみられる姿を見ることができます。牛方が藩内で沿岸と内陸を行き来していたほか、藩外からも牛を荷駄用に求められ、年間約3,000頭の南部牛が関東、上越地方へ送り出され、東日本各地で活躍していました。

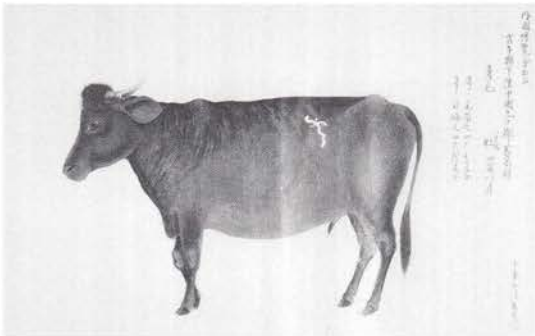
越後地方へ送られた南部牛は、丈夫で我慢強い性質から、越後闘牛で活躍してきました。文政3年(1820)の「越後古志郡二十村闘牛之圖」では、黒毛の牛と褐毛の牛が角を突き合わせています。江戸時代の秋田県の「阿仁鉱山絵図」には、黒毛斑、褐毛斑の牛が銅を背に載せて運ぶようすが描かれており、ここでも多様な毛色の牛がいたことが分かります。





### かまつだ 釜津田牛

和種 牡 5歳 黒白斑  
陸中国釜津田村（岩手県岩泉町）  
肩からの垂直距離 4尺1寸（124.2cm）  
腹部と後脚の一部に白斑が入っています。



### 葛巻牛

和種 牡 5歳 黒毛  
陸中国葛巻村（岩手県葛巻町）  
肩からの垂直距離 4尺2寸5分（128.8cm）

### ないこくかんぎょうはくらくんかい 第1回内国勸業博覧会出品動物類写生図

中嶋仰山 画  
明治10年(1877)  
東京国立博物館 所蔵 TNM Image Archives 画像提供



### あに 阿仁鉾山絵図

銅ヲ造り立テ水無村蔵宿へ運ブ図  
江戸時代  
秋田県立博物館 所蔵

## ■南部牛の体格

南部牛は肩から胸にかけての前駆の発達がよく、肩の後から腰にかけての中駆は比較的長く、脚が短く関節が丈夫だったといわれます。西日本で飼われていた牛とは体格が違い、脚が強く従順な性質の牛でした。

明治10年(1877)の第1回内国勸業博覧会に出品された2頭の純粋和種のオスは肩の高さが124.2cm、128.8cmと、日本在来牛としては大きな体格です。

発掘調査で出土した骨の計測値からも、大まかな牛の体の大きさを推定することができます。岩手県一戸町の一戸城跡で出土した古代～中世のものとみられる牛の骨からは、体高が100～115cmと推定され、体高が130cm程度ある現在の黒毛和種メス牛に比べるとかなり小柄ですが、見島牛のメス程の体格だったとされます。一方、岩手県紫波町の柳田館遺跡の牛は、臼歯の大きさから、現在の黒毛和種よりやや大きめの体格であったとされています。



### ぶっさんず まりくちゅうこくぼくぎゅうのず 錦絵「大日本物産圖會陸中国牧牛之圖」

歌川広重（三代）画 明治10年(1877)  
奥州市牛の博物館 所蔵

第1回内国勸業博覧会で出品展示された錦絵で、描かれている牛は、南部牛の血を濃く受け継いでいると考えられます。解説には、東北地方では多数の牛を生産・販売しており、50～60頭もの牛が引き綱もつけずに往来し、川を渡る様子が記されています。



## ■北上山地の産牛地帯

南部牛の生産地であった北上山地北部は急峻な山林に囲まれた地域で、平地はわずかです。そのため、広い山林を放牧地、採草地に利用した産牛が発展してきました。江戸時代後期には、南部藩の牛 15,000 頭のうち、12,000 頭が閉伊郡と九戸郡で飼われていました。

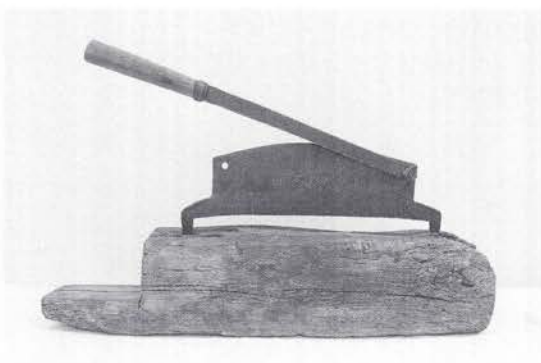
豊かな山林を活かして、夏の期間に牛を放牧し、冬は畜舎で飼育していました。5月～11月頃の期間に草地に牛を放って放牧し、春先と晩秋の1ヶ月ほどは採草地を利用して半舎飼半放牧を行います。放牧の群れには、概ねメス 40 頭に対してオス 1 頭を入れ、自由に交配させる「マキ牛繁殖」を行います。

放牧中は「ベゴマブリ」と呼ばれる監視人が山に入り、群れが危険な場所へ行かないよう監視を行いました。雪が降る時期になると、畜舎に牛を入れて世話をします。『八戸藩勘定所日記』には、天保 5 年 (1834) に火事があり、牛 4 頭が死亡、うち 2 頭は預かり牛であったと記載されており、冬は集落の畜舎に牛を集めていたことが分かります。冬は夏の間に刈りためたクズやハギ、雑穀の殻などを裁断したものを餌として与えます。消化をよくするために、これらを釜で煮てから与えることもありました。夏に放牧、冬に舎飼いをする飼育方法は、江戸時代に始まり、日本短角種で現在行われている「なつやまふゆさと夏山冬里方式」に引き継がれています。



やだはり

牛の餌を混ぜる道具です。



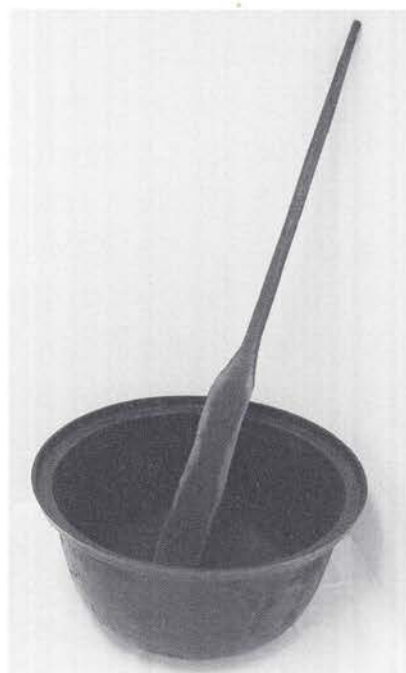
おしきり

植物の茎などを裁断する道具です。クズやハギを細かくして牛の餌を作りました。



ため

餌を一時的に入れて、「ため」へ運びました。



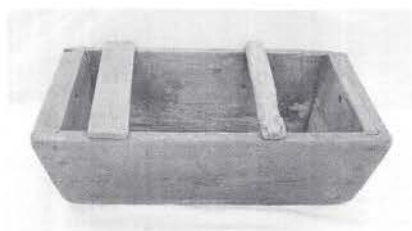
やだ釜、へら

直径 70cm を超える「やだ釜」で雑穀の殻などを加熱します。



やだかぎ

「やだ釜」で煮た餌をすくい取って、「ため」へ移します。

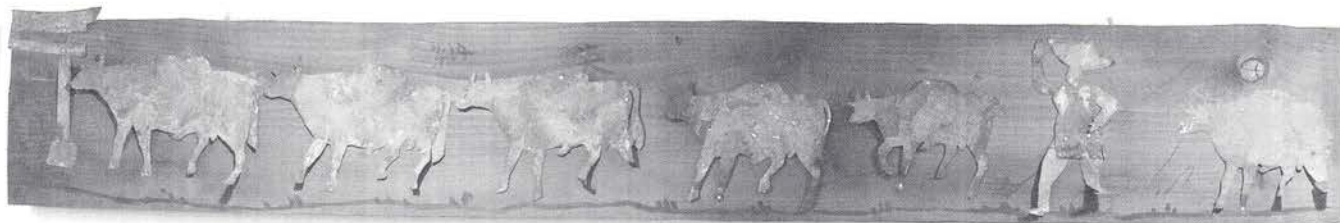


やだぶね

ひもで吊るして中に餌を入れて牛に食べさせました。クズやハギの蔓や葉、雑穀の殻や茎を与えました。

### 牛の飼育用具

岩手県葛巻町 小田やすらぎの家民俗資料館 所蔵



## ■牛の道

三陸海岸と内陸を結ぶ道にはいくつかのルートがあります。長いものでは九戸沿岸と、南部藩の城下町盛岡、鹿角地方を結んだ 200 km の旅程を牛方が塩や炭、鉄などを運搬しました。有名なものは野田から平庭峠、葛巻を経由して盛岡を結ぶ野田街道、小本から岩泉、早坂峠を経由して盛岡へ至る経路があります。

馬での輸送は、平らな道を荷車で早く進むことができますが、下り坂では荷を降ろさなくてはなりません。それに対して、牛は急な坂道でも荷物を背負ったまま上り下りできるので、目的地を最短距離で結ぶ険しい峠道を越えました。

目的地が遠方であれば、途中の牛方宿に宿泊したり、道中で野宿をすることもありました。野宿をするときには、牛の角が外に向くように牛を円状に並ばせ、オオカミやクマに備えたといわれます。

明治末になると、鉄道、自動車での荷物の輸送が確立されていき、牛方による荷物の運搬は次第に下火になります。車が入れない山奥での作業や、自家用の荷物運搬に牛方を使っていたが、昭和 30 年代には、生業としての牛方は姿を消しました。



牛の道 ルート

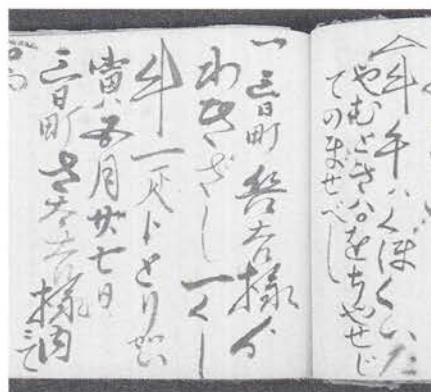
## 牛方道中絵馬（複製）

明治 40 年(1907)

奥州市牛の博物館 所蔵

(岩手県葛巻町立 神神社 原資料所蔵)

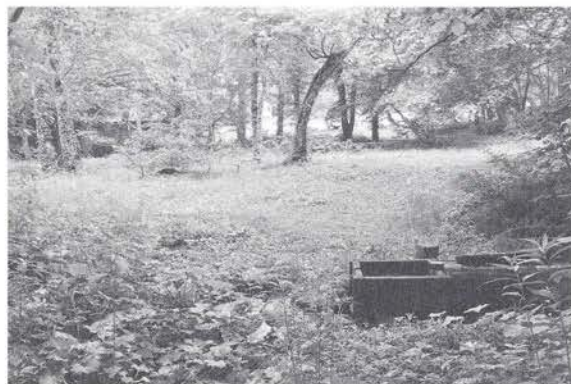
牛方を廃業する際に、これまでの生業に感謝して神社へ奉納された絵馬です。6 頭の牛と牛方がかたどられています。奉納の時期が鉄道、自動車道が整備されていく時期と重なります。



## 牛方宿の萬覚帳

個人(岩手県久慈市) 所蔵

牛方が休憩したり、荷物を交換した牛方宿の記録です。



## 奥清水のべご泊り場

岩手県久慈市山形町

牛の餌になる草地と水場を備えた場所が、牛方の野宿場所に選ばれました。

## ■牛がもたらしたもの

南部藩では、家畜を愛情こめて飼育することが大切とされ、牛馬を持つことによる経済的な効果が認められてきました。牛の恵みには、まず、南部牛方に代表される荷駄用の役畜としての活躍が挙げられます。また、牛の糞を堆肥として利用して、田畑の生産性を向上させる糞畜としての役割が重要でした。一方で、犁や馬耕を使った耕起の技術は、東北地方では江戸時代以前には普及しておらず、農耕での利用は限られたものでした。また、食肉禁忌の思想が浸透しており、大切な家畜を食べることはありませんでした。そして、あまり知られていませんが、江戸時代に南部牛の皮や牛乳が利用されていた記録があります。

『八戸藩勘定所日記』(天保8年(1837))には、「皮屋」の記述があり、南部牛の皮が馬具等に利用され、大坂方面にも出荷されていたことが分かります。

乳の利用については、横浜(青森県横浜町)、田名部(青森県むつ市)、種市(岩手県洋野町)、久慈(岩手県久慈市)、江刈(岩手県葛巻町)、葛巻(岩手県葛巻町)などで牛による搾乳が行われ、牛乳が南部藩へ献上されていました。日本では、中世の貢蘇制度が廃れて以降、明治維新後の西洋文化流入までの間の乳利用の記録はほとんど見られません。江戸時代には、徳川吉宗による白牛の導入と白牛酪はくぎゅうらくという乳製品の製造が知られていますが、東北地方にも近世初期から乳利用の習慣があったことは特筆に値します。

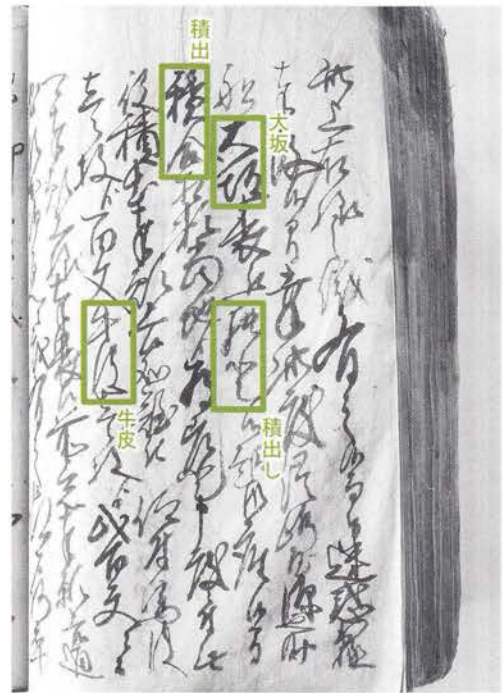
### 南部藩日誌

慶安3年(1650)7月28日

もりおか歴史文化館 所蔵

「横浜より渡辺喜左衛門、牛之乳壺孟竹筒壺つ二入次飛脚為持上ル」

現在の青森県横浜町より牛乳が献上されたことが書かれています。牛乳は竹筒に入れて飛脚で運ばれ、鮮度を保って運搬されていたようです。横浜以外にも、種市(岩手県洋野町)、久慈(岩手県久慈市)、江刈(岩手県葛巻町)、葛巻(岩手県葛巻町)からの牛乳献上の記載があり、これらの地域で搾乳が行われていたことがわかります。

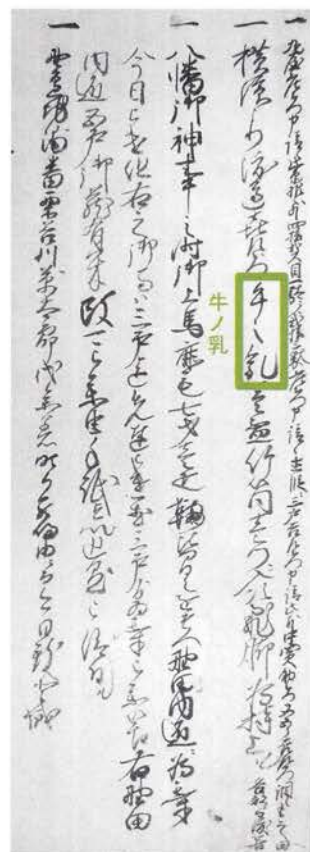


### 八戸藩勘定所日記

天保8年(1837)3月25日

八戸市立図書館 所蔵

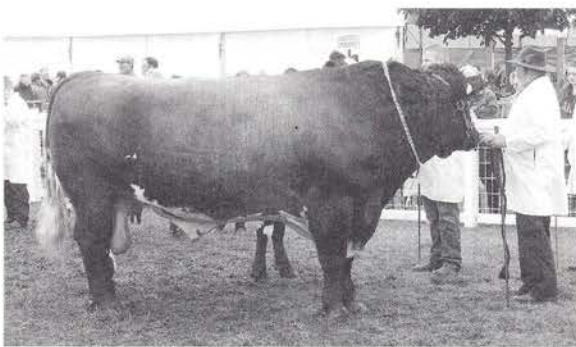
牛皮・馬皮の大坂積出願いについての内容です。牛馬の皮をめぐる取引が大坂にもおよんでいたことが分かります。



# 日本短角種の誕生

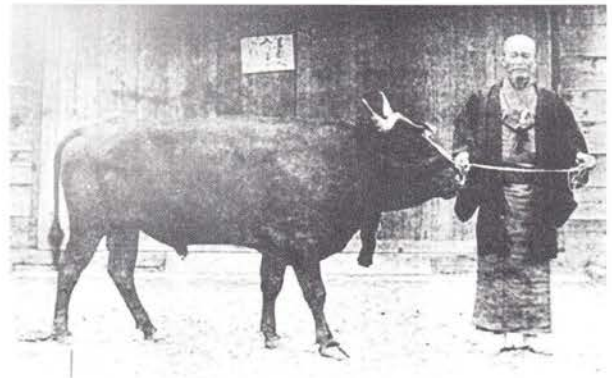
## ■外国品種との交配

明治4年(1871)年に、民部省勸農寮から岩泉へアメリカ産ショートホーンの種雄牛2頭が導入されます。しかし、小川村に導入された1頭は、1頭のメス牛に子牛を生ませたのみで返納されます。岩泉村に導入された種雄牛は2年使用した後、悪癖のために返納されました。その後、明治7~9年(1874~1876)にかけて岩泉村の有志が数回、東京から岩泉村にショートホーンの種雄牛5~6頭を移入飼育して希望者のメス牛に交配し、その系統が20頭余りに及ぶなど、外国品種との交配が浸透していきます。明治10~13年(1877~1880)の間に、岩泉地方では外国品種の種雄牛が導入され、在来牛の多くが雑種化されました。明治の末までは、デボン、ホルスタイン、エアシャーなどが導入されますが、放牧に適さなかったことから、やがてショートホーンを主として交配がすすめられていきます。



### ショートホーン種

放牧に適した乳肉兼用種です。

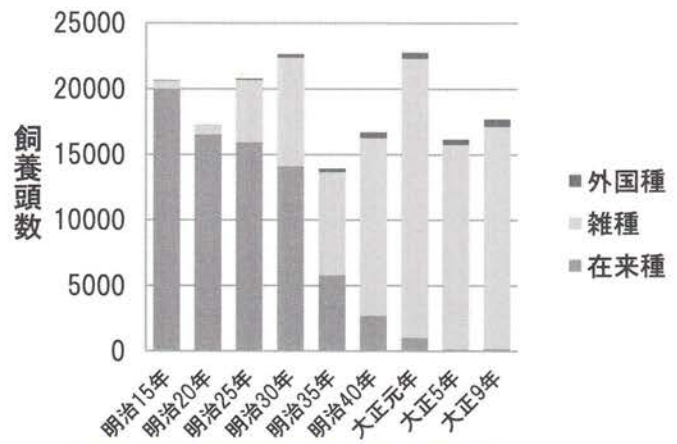


### 和洋雑種(南部牛×外国品種)

明治14年(1881)

個人(岩手県岩泉町) 所蔵

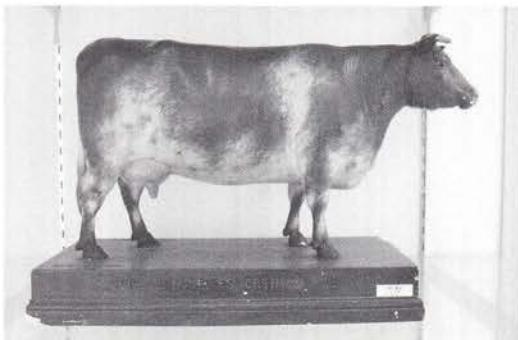
岩手県岩泉村から第2回内国勸業博覧会に出品したオス牛と所有者が写っています。ショートホーンとの雑種と思われますが、小型で前半身が発達しており、改良前の在来種の特徴をとどめています。



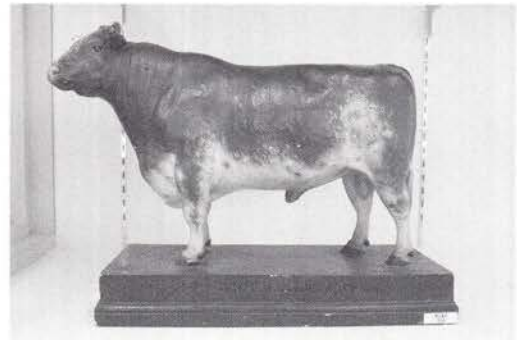
### 岩手県内の外国種と在来種の飼養頭数

山田喜平(1922)を参考に作成

明治後半に純粋な在来種が急速に減っていきます。



メス



オス

### ショートホーン種ツルタイプ

岩手大学ミュージアム所蔵 1885年 ドイツ製

## ■ 品種成立の歩み

昭和 19 年(1944)、黒毛和種、褐毛和種、無角和種の和牛の 3 品種が成立します。品種ごとに統一された標準体型が定められ、牛の血統情報が記録されることにより、組織的に改良を進められるようになります。一方、日本短角種の成立は遅れをとります。短角系種の生産が奥山の放牧地を中心に行われていたこと、生産者の育種改良への関心が低かったことなどが要因であると考えられます。

昭和 17 年(1942)には、岩手県のほか、北海道、青森、山形、秋田各県で短角系牛が飼育されていましたが、各県が独自に改良・登録事業を行っており、名称も統一されていませんでした。昭和 18 年(1943)に、役用牛、役肉用牛の体型を審査基準に定め、青森、秋田、岩手の各県で登録を開始し、昭和 26 年(1951)には改良目標を肉用にしぼり、青森、秋田両県で「東北短角種」に改称されました。昭和 32 年(1957)、日本短角種登録協会が設立され、日本で 4 番目の和牛品種として「日本短角種」が誕生し、統一した基準での登録事業が行われるようになりました。

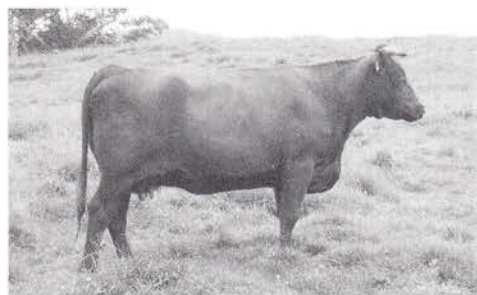
## ■ 飼養管理の利点

東北地方では、厳しい気候風土と粗放的な飼養環境で牛が選り抜かれてきたため、丈夫で粗食や寒暑に耐え、昔ながらの飼養管理に適した日本短角種が形成されてきました。

日本短角種は通常、夏山冬里の放牧方式（春から秋は放牧、冬期間は舎飼）とマキ牛繁殖（メス 40 頭前後とオス 1 頭を放牧して自然交配をさせる）を組み合わせた飼養管理が行われています。また、出産した母牛は泌乳量が多いので、離乳まで子牛を母乳のみで育てます。このような飼養管理が行われているため、飼料費や管理費などの繁殖にかかる費用は安く、また日本短角種は飼料の利用性や産肉能力が優れているため、肥育にかかる費用も安くて済みます。



オス



メス

### 日本短角種

北日本での気候風土、飼育管理習慣に適した品種です。

## ■ 日本短角種の課題

日本短角種は他の和牛品種に比べて脂肪交雑（サシ）が入りにくいために、枝肉は安い価格で取引されています。そのため、日本短角種から黒毛和種に移行する生産者も見られます。しかし、短角牛生産者は、短角種の赤肉の美味しさを産地直売や生産履歴の開示などにより、安全・安心・健康・環境負荷の低減・動物福祉などをセールスポイントとしてブランド化を図っています。赤身肉が注目され、健康志向が高まる中、流通業者、消費者、レストランなどからの短角牛の需要が高まっています。今後も産消提携や産地消費を活かした生産振興が期待されます。

一方、日本短角種は、南部牛の血を引く和牛品種として貴重な遺伝資源です。そして東北地方の人と牛の暮らしを伝える文化財でもあります。しかし、平成 27 年現在の全国の日本短角種の飼養頭数は総数で 8,450 頭と、年々減少しているために品種の希少化が進み、日本短角種集団の遺伝的多様性の低下と近親交配の進行が懸念されています。品種の希少化を防ぎ、維持・増頭を図るためには、生産振興と、遺伝的に多様な種雄牛と繁殖雌牛集団を育て、近親交配を回避することが重要です。

## 展示資料一覧

資料名	所蔵
駒焼場遺跡出土牛骨 臼歯片	二戸市埋蔵文化財センター
沢田遺跡出土牛骨 左下顎第2後臼歯 左上顎臼歯	岩手県教育委員会
柳之御所遺跡出土牛骨 脛骨	岩手県教育委員会
竜ヶ坂遺跡出土足跡 石膏型	平泉町教育委員会
一戸城跡遺跡出土牛骨 左下顎骨・臼歯 (第4前臼歯・第1後臼歯・第2後臼歯・第3後臼歯) 左下顎骨・臼歯 (第2前臼歯・第3前臼歯・第4前臼歯・第1後臼歯・第2後臼歯・第3後臼歯) 左上顎臼歯 (第4前臼歯・第1後臼歯・第2後臼歯・第3後臼歯) 右上顎臼歯 (第3前臼歯・第1後臼歯・第2後臼歯・第3後臼歯) 左上顎臼歯 (第2前臼歯・第3前臼歯・第4前臼歯・第1後臼歯・第2後臼歯・第3後臼歯) 右上顎臼歯 (第3前臼歯・第4前臼歯・第1後臼歯・第2後臼歯・第3後臼歯) 末節骨	一戸町教育委員会
柳田館遺跡出土牛骨 下顎骨破片・臼歯 (第3後臼歯) 右上顎・臼歯 (第2後臼歯)	岩手県教育委員会
口之島牛はく製	奥州市牛の博物館
郷土玩具「木牛」	奥州市牛の博物館
郷土玩具「ベゴ」	奥州市牛の博物館
錦絵「大日本物産圖會陸中國牧牛之圖」	奥州市牛の博物館
やだ釜	小田やすらぎの民俗資料館
へら	小田やすらぎの民俗資料館
やだはり	小田やすらぎの民俗資料館
カブ切り	小田やすらぎの民俗資料館
押し切り	小田やすらぎの民俗資料館
ため	小田やすらぎの民俗資料館
やだかぎ 2点	小田やすらぎの民俗資料館
やだぶね	小田やすらぎの民俗資料館
つめ切り	小田やすらぎの民俗資料館
はるび 2点	小田やすらぎの民俗資料館
くちご 2点	小田やすらぎの民俗資料館
わらじ	小田やすらぎの民俗資料館
牛模型及び鞍及び前打ち	小田やすらぎの民俗資料館
道中のまぐさ	小田やすらぎの民俗資料館
むなで	小田やすらぎの民俗資料館
前立て	小田やすらぎの民俗資料館
おとこやま	小田やすらぎの民俗資料館
はばき	小田やすらぎの民俗資料館
みぬ	小田やすらぎの民俗資料館
きりは 2点	小田やすらぎの民俗資料館
郷土玩具「ベゴ」3点	小田やすらぎの民俗資料館
こがい	葛巻小学校民俗資料室
牛方宿の萬覚帳	個人 (岩手県久慈市)
牛方道中絵馬 (複製)	奥州市牛の博物館 (岩手県葛巻町立神社 原資料所蔵)
牛方奉納絵馬 (複製)	奥州市牛の博物館 (岩手県葛巻町立神社 原資料所蔵)
南部藩日記 慶安2年 慶安3年 慶安4年	もりおか歴史文化館
ショートホーン種ツールタイプ オス メス	岩手大学ミュージアム
日本之産牛	奥州市牛の博物館
畜牛新論	奥州市牛の博物館

## 展示写真一覧

写真名	所蔵
竜ヶ坂遺跡出土水田跡牛足跡遺構	平泉町教育委員会
観自在王院跡出土車宿跡遺構	平泉町教育委員会
中村城跡出土牛足跡	(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
国牛十図	東京大学農学生命科学図書館
口之島牛	奥州市牛の博物館 (黒澤弥悦氏 写真撮影)
見島牛	奥州市牛の博物館
阿仁鉾山絵図	秋田県立博物館
越後古志郡二十村闘牛之図	長岡市立中央図書館
第1回内閣勸業博覧会出品動物類写生図 葛巻牛 釜津田牛	東京国立博物館 (TNM Image Archives 画像提供)
牛方道中の再現	久慈市
牛の道	奥州市牛の博物館
奥清水のベゴ泊り場	奥州市牛の博物館
八戸藩勘定所日記 文政11年6月12日条 天保8年3月25日条	八戸市立図書館
北上山地に広がる牧草地	奥州市牛の博物館
和洋雑種 (南部牛×外国品種)	個人 (岩手県岩泉町)
ショートホーン種	奥州市牛の博物館
日本短角種	奥州市牛の博物館
闘牛用に育成される日本短角種	奥州市牛の博物館
平庭高原の闘牛	奥州市牛の博物館

## ■ 謎に包まれた南部牛の姿

南部牛の血をひく日本短角種の飼育には、夏山冬里方式の飼育や、闘牛用の牛の育成など、かつての牛と人の付き合いが残っています。現在も山間地での生活と産牛の歴史を象徴する存在として、日本短角種が大切にされています。

在来の南部牛の姿が見られたのは明治期までで、その痕跡はわずかししか残っていません。しかし、今回の遺跡から発掘された牛の骨の調査で、南部牛の来歴をたどる糸口が見えてきました。近世以前の牛骨が県内でいくつも発見されていることが分かり、その状態を確認することができたのです。この出土牛骨から遺伝子を取り出して分析すれば、南部牛がどういった祖先を持つ牛だったのか、科学的に迫ることができます。



北上山地に広がる牧草地

岩手県葛巻町



### 闘牛用に育成される日本短角種

岩手県久慈市山形町

闘争心を失わないよう去勢をしないで、メスとは別の牛房で飼育します。



### 平庭高原の闘牛

岩手県久慈市山形町

昭和 35 年から平庭高原で闘牛大会を開催しています。新潟県小千谷、鹿児島県徳之島など各地の闘牛で日本短角種が活躍しており、平庭高原の闘牛大会には各地へ出荷する闘牛用子牛育成のねらいもあります。この地方では、昔から牛方の群れの「ワガサ」（リーダー）を決めるために牛の角突きが行われていました。

## 参考文献

- 山田喜平(1922) 岩手県の産牛 岩手県畜産会  
 平泉町教育委員会(1977) 観自在王院跡発掘調査報告書  
 家畜登録団体中央協議会(1980) 家畜登録事業発達史  
 日本短角種登録協会(1980) 日本短角種—短角を上手に飼うために—  
 岩手県教育委員会(1980) 岩手県文化財調査報告書第53集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書IV (柳田館遺跡)  
 岩手県教育委員会(1980) 岩手県文化財調査報告書第48集 東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書4 (宮地遺跡)  
 野田村村誌編纂委員会(1981) 野田塩 ベコの道 野田村教育委員会  
 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター(1989) 駒焼場遺跡発掘調査報告書 国道4号金田一バイパス関連遺跡発掘調査  
 八重樫泰治(1991) 南部牛の里 岩泉地方の畜牛史  
 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター(1995) 岩手県文化振興事業埋蔵文化財調査報告書第228集 柳の御所跡—閑遊水地事業・平泉バイパス建設関連第21・23・28・31・36・41次発掘調査報告  
 和牛地方特定品種編纂委員会編(1996) 和牛地方特定品種—あか牛・日本短角種・無角和種— 肉牛新報社  
 川田啓介・黒澤弥悦・兼松重任(1999) 第1回内国勧業博覧会(明治10年) 出品の家畜類、おもにウシについて 在来家畜研究会報告 第17号 p187-197  
 葛巻町観光協会・山形村観光協会(2002) 塩の道 野田街道  
 国土交通省岩手工事事務所・岩手県一関地方振興局一関農村整備事務所・平泉町教育委員会(2003) 岩手県平泉町文化財調査報告書第82集 一関遊水地内圃場整備関連遺跡発掘調査報告書一竜ヶ坂遺跡第1次・佐藤屋敷遺跡第2次・畑中遺跡第1次—  
 一戸町教育委員会(2003) 一戸町文化財調査報告書第45集「一戸城跡・蒔前遺跡」  
 名久井文明・名久井芳枝(2008) 地域の記憶—岩手県葛巻町小田周辺の生活史 一芦舎  
 在来家畜研究会(2009) アジアの在来家畜 家畜の起源と系統史 名古屋大学出版会  
 山形村史編さん委員会(2009) 山形村史第一巻民俗編 久慈市  
 山岸敏宏・及川卓郎・黒澤弥悦・内藤裕加里(2010) 岩手県北上山系における日本短角種の発展過程について 在来家畜研究会報告 第25号 p195-211  
 岩手県南広域振興局農政部農村整備室・(公財)岩手県文化振興事業団(2013) 岩手県文化財調査報告書第626集 沢田遺跡発掘調査報告書 経営体育成基盤整備事業南下幅北部地区関連遺跡発掘調査  
 岩手県農林水産部畜産課(2014) いわたの畜産平成26年度版  
[http://www.pref.iwate.jp/dbps\\_data/\\_material/\\_files/000/000/023/602/iwatenotikusan](http://www.pref.iwate.jp/dbps_data/_material/_files/000/000/023/602/iwatenotikusan)  
 独立行政法人家畜改良センター(2015) 牛個体識別全国データベースの集計結果  
<https://www.id.nlbc.go.jp/data/toukei.html>  
 内田宏・黒澤弥悦(2015) 日本固有のウシ品種の飼育状況と遺伝的多様性低下並びに保全対策 在来家畜研究会報告 第27号 p47-60



牛の道

岩手県久慈市山形町

## 企画展示協力 [敬称略順不同]

二戸市埋蔵文化財センター、二戸市教育委員会、御所野縄文博物館、一戸町教育委員会、平泉文化遺産センター、平泉町教育委員会、小田やすらぎの家民俗資料館、葛巻小学校、葛巻町教育委員会、岩泉町教育委員会、もりおか歴史文化館、盛岡市教育委員会、久慈市、岩手大学ミュージアム、(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、岩手県立博物館、岩手県教育委員会、秋田県立博物館、八戸市立図書館、菊田一夫記念館、長岡市立中央図書館、東京大学農学生命科学図書館、東京国立博物館、個人(岩手県久慈市)、個人(岩手県岩泉町)

## 牛の博物館開館20周年記念企画展 南部牛の姿をもとめて

2015年7月18日(土)～10月18日(日)

- 主 催：奥州市牛の博物館  
 企画展示構成：内田 宏(館長) 太田重勝(館長補佐)  
 川田啓介(主査兼首席主任学芸員) 朴沢志津江(主任学芸員)  
 森本 陽(主任学芸員) 高橋杏奈(学芸調査員)  
 本明優理(学芸調査員) 丹内里花子(学芸調査員)  
 発 行：奥州市牛の博物館  
 〒029-4205 岩手県奥州市前沢区字南陣場 103-1  
 Tel 0197-56-7666 Fax 0197-56-6264  
 発 行 日：平成27年(2015) 7月18日

## 牛の博物館友の会

会員募集中(個人会員・家族会員)

Tel0197-56-7666 Fax0197-56-6264

牛の博物館友の会はいつでも、どなたでも入会できます。会員には機関紙や企画展示解説書、行事のお知らせなどをお届けします。会員の特典として牛の博物館に無料で入館できるほか、同伴者割引もあります。